

当たり前を問い直す力

変化の時代に求められる学びと大人のまなざし

校長 田中 一秀

「緑の集大成～礼儀・自律・青春謳歌～」。先週、3年生と修学旅行に行ってきました。中学校生活の節目として、仲間とともに過ごすこの行事は、一見すると「ただの旅行」に見えるかもしれませんが、その過程と経験には、生徒たちの大きな成長が詰まっています。事前の準備では、思い通りに進まないことや意見の対立も生じます。それでも、生徒たちは立ち止まり、ときにぶつかり合いながら、少しずつ合意をつくり上げていきます。私自身の中学校時代を振り返ると、班や部屋、コース決めの際に意見が対立し、私を含めた数名の生徒は、自分たちの「いいね」という考えを譲ることができず、現地でひと騒ぎとなりました。初日と最終日のクラス写真の表情の違いは、その出来事を今も鮮明に思い出させます。あのときの担任の先生の悲しそうな表情と「信じている」という言葉は、今の私の原点となっており、教職の道へ導いたのです。

こうした経験を通して生徒たちは、「当たり前」と思っていた自分の考えや行動を見つめ直し、他者とともによりよい答えを探していきます。



私たちが生きる現代は、これまで当たり前とされてきたことが、必ずしも通用しなくなる時代です。社会の変化は加速度的に進み、過去の常識や成功体験だけでは乗り越えられない場面が増えています。だからこそ今、「当たり前を問い直す力」が、子どもたちにとって重要な資質となっています。

振り返れば、人類の歴史は常識を問い直す営みの積み重ねでした。かつて人々は天が動き、地球が宇宙の中心にあると信じていました。しかし、観察し、考え、問い続けた人々によってその考えは覆され、地動説が受け入れられていきました。今では、天動説を疑わなかったこと自体が、歴史の一コマとして語られています。

教育の在り方も変化しています。現在は「何を知っているか」だけでなく、「それをどのように活用し、どのように社会と関わるか」が重視されています。正解が一つではない課題に向き合い、考え、判断し、協働して答えを見いだす力が求められています。教育そのものもまた、これまでの当たり前を問い直しながら、変化し続けています。

では、私たち大人はどうでしょうか。「昔はこうだった」「今の子どもは」と、過去の物差しで子どもたちを見てはいないでしょうか。子どもたちに「自分で考えよう」「疑問を大切にしよう」と伝える一方で、子どもたちの考えを、自分の経験に照らして無意識に否定してはいないでしょうか。私たち自身が学び、考えることを止めてしまっていないでしょうか。

学校は、子どもたちが安心して問い、考え、失敗から学べる場でありたいと考えています。同時に、家庭や地域においても、子どもたちが安心して挑戦できる環境が広がることを願っています。そして私たち大人もまた、子どもたちとともに学び続け、変化していく存在でありたいと思います。

当たり前を問い直すことは、決して否定することではありません。過去を否定するのではなく、過去に敬意を払いながら、未来に橋を架けることです。よりよい未来のために立ち止まり、考え直す勇気をもつことです。これからの時代を生きる子どもたちとともに、私たち大人も学び続けていきましょう。